

## 「もう少し先の答え」を聞きたかった

---

川 添 信 介

中川純男さんが今となっては決して長かったとは言えないことになってしまった研究生活で問おうとしてこられたのは、いったい何だったのだろうか。

「アウグスティヌスにおける人間理解——『告白』第一卷二章三章をめぐって」。これが中川さんが昭和 48（1973）年に京都大学に提出した修士論文の題目である。追悼文を草するにあたり私は初めて、恩師山田晶先生の鉛筆書きの傍線がところどころに残された 80 枚のこの論文を読んで、ある種の驚きを抑えることができなかった。ここですでに、後年になって中川さんが書かれた論文と「同じスタイル」が確立されているのである。この修士論文は表題にあるアウグスティヌスのごく短いテキストだけを材料とし、そこに含まれる内的な論理を丁寧に吟味し、自己の解釈を提示しようとしたものである。アウグスティヌスの『告白』以外の書物どころか、『告白』内部の別のテキストさえ一度も引証されることはない。ましてや二次文献が挙げられることもない。このような論文のスタイルは、容易なようであるが、相当な自信がなければ取れるスタイルではない。テキストに対するご自身の「読み」に対する揺るぎのない自信である。

中川さんは、修士論文ほど極端なかたちではないにしても、基本的にこのようなスタイルを最後まで貫かれていたと思う。『パイドン』の場合でも、『エンネアデス』の場合でも原典に密着した丁寧な読みが根底におかれていたし、その解釈は読むものに説得力をもって迫ってきた。ストアの諸著作やトマス・アクィナスを取り上げられた場合も同じであった。中川さんの論文は時として唐突とも思えるほどに原典テキストの

引用からはじまり、途中ではどこに連れて行かれるのか不安に思いながら読み進めると、最後には大きな問題が広い視野のもとで考察されていることが見えてくるといったことがしばしばであった。しかし、この唐突さや抱いた不安は多くの場合には読み手である私の勉強不足と洞察力の欠如のためであって、読後には中川さんが論文で取り上げられた比較的短いテキストの背後に膨大な量の読書が控えていることがひしひしと感じられたのである。

ご自身の研究のすべてを曝け出さないいわば禁欲的なスタイルは、修士論文においてすでに典型的に現れていたのである。しかし、スタイルだけではなく、そこで問われている問いと吟味された思考の内容もその後の中川さんの探求の方向性をすでに示していたことが、私にはいっそうの驚きだった。この論文では「アウグスティヌスは自己をいかなる世界のうちにおいて理解しているのか」と「その世界のうちにおいて人間はいかなるものとして理解されているのか」という二つの問いが立てられている。最初の問いに対しては、アウグスティヌスにとって自己は被造物としての世界において理解されているのだが、その世界は自然的世界であるにとどまらずその世界の外では「存在していない」として捉えられているような世界なのだという解釈が提示される。第二の問いに対しては、最初の問いへの解答を前提にして、人間は全体として存在していない自己を完全に実現することが出来ないにもかかわらず（出来ないゆえに）、人間は全体として存在している神を呼び求め神に近づく存在なのだというアウグスティヌス理解を中川さんは示している。そして最後に、この神に近づくということがどのようなことなのかということが問いとして残ることを指摘して論文は閉じられている。

ここで提示されている「自然的世界の外ということ」、それと「全体として存在することへの希求」、この二つがどのように関係しているのかを徹底的に考えるということが、常に中川さんの思索を導いていたのではないかと私には思われる。「自然的世界の外」はこの修士論文では（取り上げた材料から当然であるが）さしあたりは創造者である神として設定されている。また、「全体として存在する」ということも神のように全体として存在するものとの対比で人間のあり方から捉えられている。しかし、中川さんはどこかの時点で人間を一挙に神と対比するので

はなくて、上の二つのことを考察するのに人間の「知る」というのはたらしきを媒介とする必要性を洞察されたのだらうと思う。中川さんは後年書店のアンケートに対して『『デ・アニマ』は百科事典』と答えておられるが、このアリストテレスの著作の中で中川さんがもっともしばしば考察の対象とされたのは、感覚や知性に関して「現実態においては認識するものと認識されるものとは同じである」という思想であろう。この認識についての捉え方を座標軸にして、プラトンの想起説やイデア論が再吟味され、プロティノスによるこの思想の変奏が検討に付され、そして『ソリロクシア』の真理論も再読され、さらにはトマス・アキナスの真理概念へと接続して解釈が施された。つまり、全体として存在していない人間が全体として存在するようになることを考えるためには、知るものである自己が自己ならざる知られるものとなって存在するようになることである「知ること」の意味を吟味しなければならなかったのである。そしてまた、「自然的世界の外」ということも、直ちに「超自然的な世界」ではなく、この「知る」ことの成立する場所として捉えなおされていたのだと思われるのである。さらには、後年ストア派をも迂回しながら探求された倫理学に関わる中川さんの探求も、修士論文では「全体として存在することへの希求」は『告白』冒頭の神への「呼び求め」としてだけ取り押さえられていたのであるが、そのことをより精密に歴史的布置のなかにおきなおして理解しようとするためのものだったのではないだろうか。この点には単に「知る」ことにとどまらない人間の深淵が姿を見せるのかもしれない。しかし、中川さんはこの深淵について古典学者らしく大仰な言辭は弄さずに、冷静な吟味を重ねられたのである。そしてこのことは、「人間とは何か」というもっとも根底的な問いに収斂する諸問題に、哲学者として真正面から立ち向かわれたのだということになるのだらう。

若いときの修士論文から以上のような推測を述べることになったが、もし中川さんがこれを知れば「僕はそんな風に考えたわけじゃないよ」と一蹴されるかもしれない。こんな浅薄な私の理解は広く豊かであった中川さんの研究に不釣合いであるのは間違いがない。しかしながら、後に続く者の一人としては、中川さんのご研究とは何であったのかについて

て、何がしかの理解を持っていなければならないと思う。少なくとも、問おうとされたことが何であったのかについては了解しておきたい。とはいえ、立てられた問いに対する中川さんの「もう少し先の答え」も聞きたかった。晩年には「少し見通しが立ってきたよ」と周囲には漏らされていたとのことで、なおさらいっそうその想いを深くするが、なにより中川さんご自身が一番残念がっておられることだろう。中川さんの「もう少し先の答え」が聞けなくなってしまったことが、本当に残念ではない。